# 高専人のネットワーク紹介と総務省とNICTのICT高専学生応援プログラム

誕生以来まもなく半世紀を迎える高専の現役学生、OBならびに関係者、いわゆる高専人のネットワークのうち、私が顧問をしているものなどの紹介と総務省ならびに（独）情報通信研究機構（NICT）が頑張るICT高専学生応援プログラムの一環として実施している2つのコンテストについて紹介する。

「頑張る高専ICTビジネスコンテスト」で表彰された高専学生達
（2011.3.11 東京・飯田橋）

東京都立航空工業高等専門学校 名誉教授（元校長）
財団法人日本無線協会 専務理事　島田 一雄

## はじめに

2011年3月11日、私は東京の飯田橋駅近くで、頑張るICT高専学生応援プログラムの一環として総務省とNICTが主催し、（独）国立高専機構（以後、高専機構と表す）が協力して開催された「頑張る高専ICTビジネスコンテスト～地域の宝！モバイルアプリ～」[1]に出席していた。全国の8国立高専から12チームが出場しており、独創的な作品の上手なプレゼンを頼もしく聞いていた。14時46分の地震発生時は、休憩時間中で、私は高専機構と主催者の方と3人で入り口付近で立ち話中で、未経験の激震に驚き振り返ると、100名近くの参加者はテーブルの下に潜っていた。余震の続く中、夕方までコンテストが続けられ、情報交流会も行われたことは全国から上京した学生諸君には良かった。その後、彼等が徒歩で宿泊場所まで行くという帰宅難民の貴重な体験をしたことも、将来何かの役に立つであろう。

被災者の方々に心からお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復旧、復興がなされ、原発事故が早急に収束することを祈る。

## ヒューマンネットワーク高専（HNK）[2]

HNKは国公私立を問わない全国高専OBの連携、躍進をめざすため、1996年に長野高専OBが中心となり創られた会で、準備期間を入れると20年近くの永い歴史を持つ組織で、高専機構のHPにも、同窓会に次いで紹介され、その活動が期待されている。設立に心血を注ぎ、永年、かなりの犠牲を負いつつも会の運営を今日まで継続し、現在も事務局長として大任を果たしている宮下和美さん（長野高専3期）を中心として、ともに苦労してきた副会長の田玉治實さん（長野高専1期）をはじめとする設立メンバーに敬意を表する。

各高専の同窓会がOBをつなぐ縦糸の役割を担っているのに対して、HNKは各高専の枠を超える横糸の役割を演じており、普段のML（メーリングリスト）による密な交流に加えて、年一回の各地での持ち回りの総会、各支部の総会、支部主催のフォーラム、各地域での月例会などを開催して、情報交換、交流を図っている。

1997年1月には、会員相互のための機関誌「赤とんぼ第1号」（A4版50頁）が発行され、その後、年1回の発行を原則として、これまでに第12号まで発行されている。編集委員長の尾上良明さん（都城高

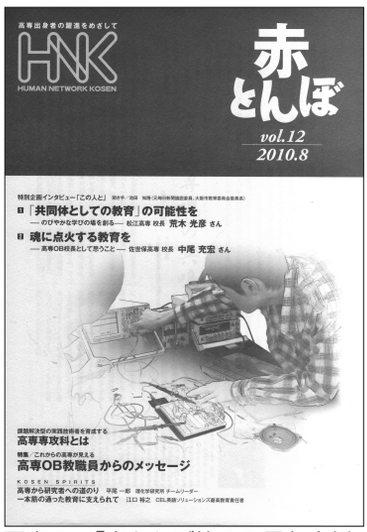


写真１「赤とんぼ第 12 号」表紙

専３期）、編集顧問の池田知隆さん（有明高専２期）をはじめとする編集委員の永年にわたる高専魂によるたゆまぬ努力には頭が下がる。最近は、頁数、発行部数とも増えてきており、HNK が高専応援団を指向しはじめていることとも相まって、広報機関誌的な色合いが濃くなってきている。

2010 年 8 月に発行された最新の第 12 号は、“高専教育の実態を知る特集号”的な内容であり、A4 版 128 頁で 3,000 部発行された。35 名を超す高専 OB 教職員からの寄稿記事に加えて、特別企画として高専教育の良さを本 [3] にまとめられた荒木光彦松江高専校長ならびに高専 OB であられる中尾充宏佐世保高専校長のお二人へのインタビュー記事も掲載されている。自らも学んだ高専で溌剌と後輩に接している若い先生から超ベテランの先生までの幅の広い年令層の先生方が、学生と先生の両方の視点で素晴しき高専教育について綴っておられ、高専教育の実態が手に取るように分かる内容となっている。つい最近、宮下事務局長の出身中学の後輩が「赤とんぼ第 12 号」（写真 1）を読んで、高専を志望して、見事合格したとの嬉しいニュースが飛び込んできた。まもなく第 13 号の編纂計画を立てる時期であるが、バックナンバーを含む有益な「赤とんぼ」が一人でも多くの全国の中学生や保護者の方の目に触れるような仕組みづくりが急がれる。

来年の高専創立 50 周年を迎えるに当たり、全国高専同窓会を結ぶ要としての重要な役割を HNK が担うべき状況をも踏まえ、従前から計画されていた 40 万人高専パワーを活かす会社が HNK 有志により設立され、新年度から事業を開始するとのホットな情報に接し、その事業展開に期待するところ大である。本事業の主な目的は以下の通りである。

- 高専の発展と日本の科学技術の発展に寄与
- 高専発シーズと開発企業の技術マッチング
- 専門技能・技術を持った HNK 会員への事業化支援
- HNK 活動および高専機構への支援
- HNK 会員のための福利厚生

## 高専カンファレンス [4]

「高専カンファレンス」は、2008 年 6 月に実行委員会代表の大日向大地さん（長野高専 35 期）が中心となって立ち上げた 30 才前後の主として ICT 分野で働く若い高専 OB と現役高専生によるプレゼン型勉強会である。土曜の午後の開催で、高専生活、ICT、工業デザイン、経営、理学、DNA 研究、人工衛星開発など広範に及ぶ多様なテーマについて、一般発表（15 分間）と Lighting Talk（5 分間）、時には講演が行われている。高専をバックボーンとする参加者は、ワクワク感を共有、意気投合し、楽しく学び合っており、懇親会が必ず開かれ交流の輪が次々と拡がっていること、特に多くの高専生が他高専の OB と交流していることは大変意義深い。平均的な参加者は 50 名前後であるが、必ず、ライブ中継（チャット付き）を行っており、30 名前後のアクセスがあるという。また、中継動画が YouTube などにアップロードされており、ICT を活用した現代的な運営を行っているところは、さすが高専 OB と高く評価できる。

2008 年 6 月の第 1 回は東京で開催され、その後は、第 1 回の主催者の心配をよそに、主として現役の高専生の参加者が「自分のところでもやりたい」と手を上げて委員会をつくり開催運営をするかたちが定着し、

写真２　オープンペーパ「EM 高専カンファレンス」表紙

次々と自律的に開催場所が決まっていくのが喜ばしい。開催運営者は発表者、参加者をインターネットで公募しており、高専カンファレンス実行委員会が開催の支援を行う運営方式をとっており、常時、ML による密なコミュニケーションがとられている。

2011 年 3 月末迄に通算 26 回開催されている。開催地は全国に分布しており、これまで、東京、北海道、東北、北陸、信越、東海、関西、四国、九州の各地で開催されている。女性 OB の活動もパワフルで、2010 年9月には女性のみによる第1回の「高専女子カンファレンス」が東京で開催され、第 2 回が 2011 年 8 月に計画されている。また、新たな試みの「理学カンファレンス」の開催も 2011 年 8 月に予定されている。

2009 年 11 月の第 9 回高専カンファレンスは、私の提案で、都立産業技術高専荒川キャンパスで開催され、参加者が 200 名を超す大カンファレンスが盛大に行われた。2010 年 10 月にも自発的に同校で大カンファレンス、しかもはじめての試みの複数会場で並列発表を行うアンカンファレンスが開催され、年 1 回の総会的なカンファレンスが定着したことは嬉しい。同校を全国から首都圏に集って来ている全国高専 OB の“第二の母校”として活用願いたいとの私の持論が今後も活かされていって欲しいと念願する次第である。

一方、実行委員会副代表の五十嵐邦明さん（群馬高専 32 期）が編集長となり、2011 年 2 月に、過去の高専カンファレンスの中から選りすぐりのテーマをまとめた、装丁も素晴らしい無料配布のオープンペーパー「EM 高専カンファレンス」(28 頁、3,000 部、写真 2) [5] が発行され、短期間に品切れになったという。同誌の発行により、高専カンファレンスの今後のさらなる発展に大きな道筋がつけられたものと高く評価でき、継続発行が楽しみである。

## 組込みシステム業界高専 OB ネットワーク [6]

若年からコンピュータに慣れ親しんだ高専 OB の ICT 分野での活躍は、世界的にも非常に高い評価を得ており、組込み業界でも組込みシステム創成期から高専 OB が活躍していると聞いている。2009 年度の組込み総合技術展の際に、中村正規さん（鶴岡高専 1 期）が中心となり、「組込み業界高専 OB 交流会」が開催された。この交流会から派生して、2010 年初めに「組込みシステム業界高専 OB ネットワーク」の ML が構築され、活発な交流が図られており、関連イベントでの交流に加え、2010 年 7 月上旬に行われた「Imagine Cup 2010 世界大会」への参加高専学生をエンカレッジするなど、高専生への応援も始めている。“高専生、ICT 強し”の評判をさらに高める上に大きな力になるものと期待しているところである。

## 総務省と NICT による頑張る ICT 高専学生応援プログラム [7]

総務省と NICT は、我が国の ICT 分野に於ける産業競争力強化と地方再生に向けて強力なうねりを造り出していく第一歩として、その潜在的担い手として期待される高専学生に対して、2007 年 2 月 1 日に「頑張る ICT 高専学生応援プログラム」を共同発表し、その後これまでに多様な支援を行ってきている。この支援は高専にとって大変喜ばしいことある。ここでは本プログラムに中から、以下の 2 つについて紹介する。

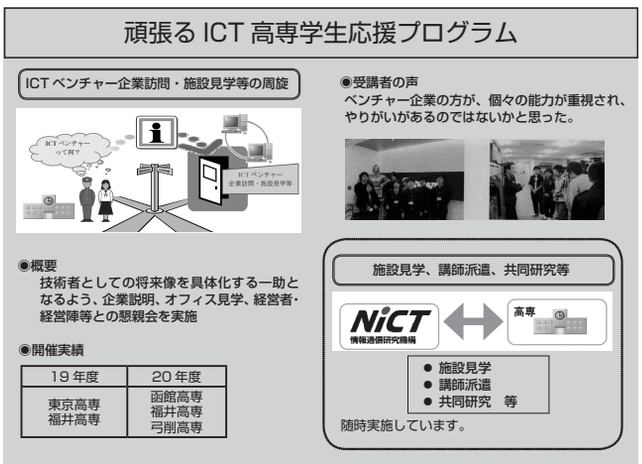



図 1　NICT の ICT 高専応援プログラム

### 頑張る高専 ICT ビジネスコンテスト

本コンテストは、全国の高専学生に ICT に関する商品・サービスの開発を通して、ものづくりの体験とその PR プランをも作成して実ビジネスの疑似体験を

写真 3 「頑張る高専 ICT ビジネスコンテスト」の模様(2011.3.11)

してもらう目的で開催された。「はじめに」で述べた要領で行われ、審査員長が㈱ jig.jp 社長の福野泰助さん（福井高専 99 年卒）であったことに加えて、協賛 ICT 企業社長の中にも 2 人の高専 OB がいたこと、また「モバイルアプリよりも高専生こそが地域の宝！日本の宝！！」と司会者に高専生が賞賛されたことがとても嬉しかった。

### ＜ t-cup チャレンジ＞
### 時の甲子園 in 小金井・技術コンテスト［8］

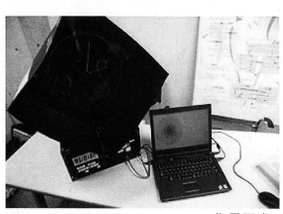
本コンテストは NICT 主催、高専機構ほかの機関の協力で開催されている、“時”をテーマとしたコンテストで、2010 年度から始まり、小・中学生対象の「アイデア時計の部」もある。高専学生と高校生が対象の「技術コンテスト」には、ハードウェア部門とソフトウエア部門がある。第 1 回は、3 高専・5 チームのユニークな作品が競われた。現在は本年 6 月開催の第 2 回審査会に向けて一次審査通過作品の製作が行われている。高専への支援に感謝して運営委員になった私は、参加高専を増やし、コンテストの発展に尽くしたい。

【グランプリ作品】

タイトル：ＬＥＤキャンパス絵画時計
学校名　：香川高等専門学校 詫間キャンパス
チーム名：「ドリームランド」

◆作品概要

回転するLEDバーサライトで描かれる円形キャンパス上に針を表現する時計。その場でパソコンで描いた絵も同時に表現。付加機能としてアラーム機能、タイマー機能、温度・湿度計、メロディ機能、芳香機能を装備。



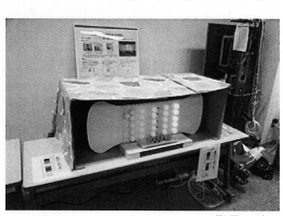
作品写真

【ハードウェア部門賞作品】

タイトル：抵抗する時計
学校名　：香川高等専門学校 詫間キャンパス
チーム名：「TNCT」

◆作品概要

時刻の数字を抵抗のカラーコードで表現する時計。LEDによりカラーコード各色を再現。オームの法則を学ぶための教材としての機能も持たせたほか、切り替えることで温度、発電量や占いの結果なども表示可能。



作品写真

【ソフトウェア部門賞作品】

タイトル：日時計シミュレータ
学校名　：東京都立産業技術高等専門学校
チーム名：高野研究室

◆作品概要

パソコン画面上で日時計を再現するシミュレータ。太陽の座標を算出することで、太陽軌道と影の長さを計算し、南北半球や赤道付近など経緯度の違う世界各地の日時計の変化を表現できる。

作品写真

図 2 「第 1 回 時の甲子園 in 小金井・技術コンテスト」入賞作品

写真 4 「時の甲子園 in 小金井」の受賞者達（2010.7.25）

## おわりに

エネルギッシュな高専カンファレンスグループの行動力は目を見張るものがあり、彼等の守備範囲の ICT 分野では、震災後、新サービスのリリースが急務となり、複数のメンバーが頑張っているとのホットな連絡を受けている。一方、彼等は既に 3 月 26 日に行われた「高専カンファレンス in 和歌山」から被災した高専の支援に向けた義援金募集活動を開始しているし、HNK でも復旧、復興に向けた活動を始めると聞いている。40 万人高専 OB のパワーが復旧、復興のために発揮されることを大いに期待したい。

2010 年末の就職内定状況調査で、大学（学部）の内定率約 69％に対して、高専が約 95％の高い内定率を保っているのは産業界が高専卒に期待していることの現われで喜ばしいが、学齢だけで短大卒と同等の待遇を受けているのが一般的なのは、非常に残念である。新卒、既卒の彼等が生涯にわたって活き活きと活躍できるように、実力相応の待遇と社会的なステイタスを与えていただきたく、産業界の皆様にお願いする次第である。

文献
[1] 頑張る高専 ICT ビジネスコンテスト：
http://www.venture.nict.go.jp/contest/venture
[2] ヒューマンネットワーク高専：http://www.hnk.jp/
[3] 荒木光彦監修，“技術者の姿 －技術立国を支える高専卒業生たち－”，世界思想社，（2007)212 頁．
[4] 高専カンファレンス wiki：http：//kosenconf.jp/
[5] 高専カンファレンス実行委員会 +EM ZERO 編集部，“EM 高専カンファレンス”，( 株 ) マナスリンク，(2011)28 頁．：
http://www.manaslink.com/em/emzero/em-kc/
[6] 組込みシステム業界高専 OB ネットワーク：
http://www.eis-japan.com/osirase091202html
[7] 頑張る ICT 高専学生応援プログラム：
http://www.venture.nict.go.jp/contest/venture/ict
[8] ＜ t-cup チャレンジ＞時の甲子園 in 小金井：
http://t-cup.nict.go.jp/